

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

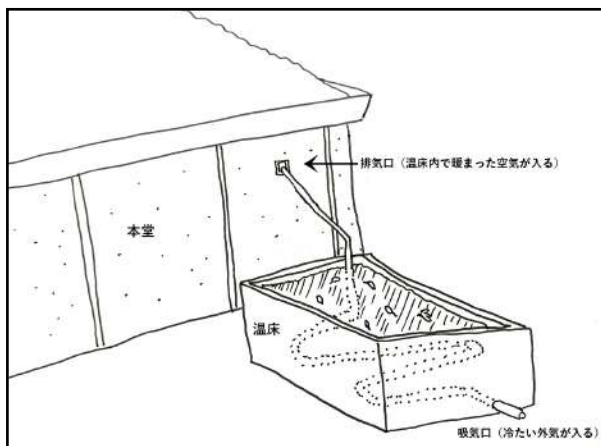
2026年3月12日

はじめに

前回の報告から半年近く間があいた。この報告書も回を重ねてきて、若干のマンネリ化を感じる。とはいえ勉強は続いている。報告は追いついていないが、私はせっせと勉強堂に通い、あれこれと手を動かしている。この号でどこまで行けるかわからないが、いまいちど気持ちを引き締め、気合いを入れなおして、誰にも頼まれていない報告の続きを記していこうと思う。前号は本堂の中で初めて就寝した、というところで終わっている。少しずつ生活環境が整ってきており、ここからはいよいよ、暖房の実験が始まる。

暖房のつくりかたの整理

報告の前に、勉強堂に実装する暖房の仕組みについて、いちど整理しておく。



- ①暖房は、落ち葉の発酵熱を利用する。木材で発酵槽（温床）をつくり、落ち葉と米ぬかと水を混ぜて熱を発生させる
- ②温床は本堂の外につくり、その壁には吸気口をあげ、そこから塩ビパイプを通す。空気は温まると軽くなり、自然と上に流れる性質を利用して、本堂の壁から暖気の中に入れる（左図）
- ③温床は、ときどき鍬を入れて「切り返し」を行い、酸素を補給させる必要がある。パイプを温床の底に設置してしまうと、その切り返しがやりにくくなるので（札幌の教訓）、温床内の上部を通るように設置する
- ④内部のパイプは接着材で連結させた方がよいが、吸気口（排気口）と内部のパイプは着脱可能にする。こうすることで、切り返し作業の時にパイプが取り外せる（邪魔にならない）

⑤内部のパイプは細く、肉薄で、長いほどよい。温床内を空気が通過する時間を増やすために

⑥発酵熱は高ければ高いほどよい。つまり、温床の体積は大きめである必要がある

日報

第一期（11月20日～22日）

<今回の滞在で行いたいこと>

- ・落ち葉を集める
- ・本堂の窓にアクリル板もしくは透明な塩ビ版をはめる
- ・本堂の内装工事をやる。特に机と椅子。ベッドをどうするかも考えたい
- ・シンクも設置できるか検討



11月20日

久々に勉強堂に来たら、「食堂まつした」が跡形もなくなっていた（左図）。閉店の知らせを聞いてからこの光景を予想はしていたが、目の当たりにするとショックだ。なぜどこにでもある店が生き残り、ここにしかない店から潰れていくのか。

例によって、午前中は草刈りをした。刈払機のブレードはぼろぼろのまま交換できていない。これを手にするといつも、一度ここに手伝いに来てくれた白田さんの言葉を思い出す。

「自分の後輩が仕事の現場にこんな道具を持ってきたらぶっとぼす」言われた時はビビったけれど、同時に嬉しくもあった。今度こそ、この滞りで、ブレードを交換したい。

草の丈はさほど高くなく、刈るのは楽だった。気になっていた滝口さん側の敷地も、草ぼうぼうのジャングル状態になっているところを想像していたが、大丈夫だった。8月末に柚木さんが刈ってくれていたおかげで、助かった。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日



トイレの中で好き放題生えていた草も引っこ抜いた。壁の内側だろうが外側だろうが、草は同じように生える（右上写真）。

<いきなりコラム「地面考」>

勉強堂では、ちょっと目を離すだけで、ものが「地面」になっていく。放置された木の板はどんどん地面の色に近づいていくし、ドアの蝶番のネジ穴には蜘蛛が巣をつくって、そこを地面の延長に変えていく。地面はいろいろな形でやってくる。工具の持ち手やバケツの底など、あらゆる場所に地面はくっついていく。それは土だったり、たくさんの粒みtainな卵だったり、粉だったり、草だったり、白い糸の塊だったり、動物だったりする。土、草、草の種、蜘蛛の巣やイモムシの繭、カメムシの卵、ゴキブリやバッタなどの生き物たち。そういった地面の使用者たちが、あらゆる場所を覆っている。すべての場所にいながらにして、さらにすべての場所を呑み込もうと動き回っている。ここにいると、普段住んでいる家がいかに地面と距離をとっているか、ということがよくわかる。地面から切り離された家で生活を送っていると、この侵食のスピードと同時多発性はあまり実感できない。ちょっと目を離すと、あらゆるものが土埃にパックされているし、蜘蛛は巣をつくるし、草の種やらカマキリの卵やらがくっついていく。9月に壁に立てかけておいた木の板を手にとってみたら、裏にテント型の蜘蛛の巣が張り付いていて、カメムシの卵も産み付けられていて、土まみれになっている。これはもう木の板ではない。地面である。



午後、クリームパンをふたつ口に突っ込み、有野実苑オートキャンプ場へ向かう。ここには落ち葉がたくさんあるかもと、以前教えてもらった場所だ。誰に教わったのかは忘れてしまった。暖房制作に向けて、落ち葉をぼちぼち集めはじめる。大きなキャンプ場で、インディ・ジョーンズのテーマがずっと流れているかっこいい小屋もある。受付でスタッフに、「この近くのアトリエで作品を作っている美術作家のものなのですが、作品に落ち葉がたくさん必要で、この敷地内の落ち葉をちょっと集めさせてくれませんか」と率直に相談してみる。ちょっとお待ちください、とスタッフは奥に引っ込み、代わりに男性が出てきた。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

オーナーはめちゃいい感じの中年男性的人物で、ゆったりとした時間をその身の内に抱えているような趣があり、この人自身がキャンプ場みたいだと思った。「国際芸術祭あいち2025コーディネーター」の名刺を渡したら「私も」と名刺をくれた。鈴木さんという方だった。事情を話したら、落ち葉集めを快諾してくれた。



「今日もうさつき集めちゃったみたいなんだけど…」と申し訳なきようにしつつ、「でもこことか、あそことか」と落ち葉が残っているエリアを教えてくれた。朝方けっこうな雨が降っていたことを、鈴木さんは「いま集めたら濡れてるけど」と心配してくれる。濡れてもぜんぜん大丈夫で、落ち葉堆肥をつくる過程で出る熱を使って暖房をつくるんです、と説明したら「スゴいなあ」と笑ってくれた。そして「うちも落ち葉集めて腐葉土つくってるんですよ。畑もやってるから、そこに撒いてます。そうしないと、こんだけの木がぜんぶ葉を落とすから、処理しきれない」と、敷地内で集めた落ち葉が山になっている場所を案内してくれた。

これから紅葉が本格化していき、落ち葉のピークは12月なかばくらいだという。「なので、今日取ってみてまた必要だったらまた連絡ください。前日に電話もらえたら、集めないでとっとくんで」と、とても親切にしてくれた。

それから4時間かけて600×900のガラ袋11袋ぶんを集めた。主にケヤキ、クヌギと、コブシ（もしくはハクレン）。落ち葉の下に潜んでいた小さなゴキブリたちも一緒に袋詰めした。勉強堂と同じく、こういった環境では彼らの姿もまったく不快に感じない。集め終えた頃、ちょうどレトリバーと散歩中の鈴木さんにばったり会ったので、作業が終了した旨を伝え、お礼を言ってキャンプ場を後にした。

その後カインズで買い出し。「ハモニカーボ」という透明プラダンのような板と画鋸（窓用）、ベッド用の垂木、机の天板（アカシア集成材）と、油性ペンキとペンキ塗り用のローラー（温床の箱用）、白田さんのことを思い出しながら刈払機のブレードの替えも購入。ブレードは思いのほか安かった。その後、湯楽の里で風呂とご飯。閉店の23時近くまで日報を書く。

11月21日

<いきなりコラム「寝返り考」>

朝6時ごろに一度目が覚めてふと、横になっている自分は3次元の生物なので、右か左の二方向にしか寝返りをうつことができないけれど、四次元の生物が横になったとき、「左右」という軸に直行する軸がもうひとつ存在することになるから、全部で四つの方向に寝返りが打てるという衝撃的な事実を発見する。コロコロと体が自然に回転する先が4つもあるというのはどんな気分だろう。そのベッドはどんな形をしているのだろうか。反対に、2次元の生物は寝返りが打てない。体の中心を軸にして時計回りと反時計回りに回転することはできるだろうけど、それは寝返りではないよなあ、と考えを進めるうちに二度寝していた。



朝9時半ごろ、本堂の屋根を見たら、土がところどころ垂直に隆起していて、ミニチュア古代都市のような景観を形づくっていた。霜が降りたあとだ。明け方は冬のような冷え込みで、寝袋から露出した顔に冷気が刺さってきたことを思い出す。

ただでさえすでに古びた雰囲気醸しだしていた本堂の屋根に古代都市が出現したことで、いよいよ時空が歪んできた。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日



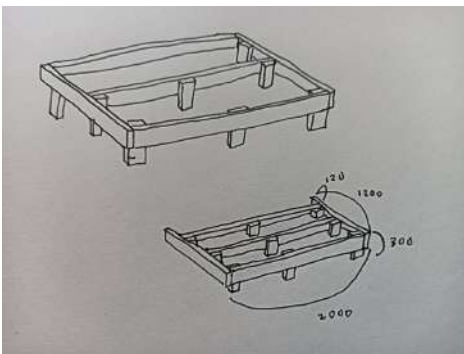
昨日買った刈払機のブレードを古いものと交換して、草刈りしてみた。切れ味がぜんぜんちがう。刈った後の植物の茎は、ルパン三世で五右衛門が切ったあとの自動車の切断面を思い起こさせる。

こうなると草刈りにも精が出る。あそこも、ここも刈ってやろうという気持ちになれる。道具を良い状態で使うことは、なによりも精神のために大切なことなのかもしれない。



<いきなりコラム「地面考2」>

草刈りをしながら手元のつるを一本つまんで持ち上げると、それが完結した一本のつるではないことがわかる。周囲の別の植物のツルや茎と絡み合い一体化していて、全体としては1枚の布のようになっている。そんな野生の織物が、一日一センチずつ、ブルーシートや脚立やトロブネに波のように押し寄せている。これを「地面の波」と呼んでみる。ある波が下のものに覆い被さると、別のものがさらに上から覆い被さってくる。それが繰り返されるうちに、「布」のようなものが織り上げられていく。これは「地面の布」と呼ぶことにする。



晴れていて、風もなく、日が暖かくて薄い長袖1枚でよいくらいの、作業するには抜群の気候だった。草刈りのあとradikoで武田砂鉄のラジオマガジンを聴きながら、昨日買った杉材(30mm×40mm)と、手元の2×4材を組み合わせてベッドの骨組みを作った。高さは30cm。広さはちょっと悩んだけれど、思い切ってセミダブルサイズ(1200mm×2000mm)にしてみた。ベッドが本堂の半分ほどを占めることになる。冷暖房を実感するのに一番大切なのは就寝の体験である。いずれ勉強堂で冷房と暖房を体験しながら泊まれるワークショップを実施した時に、定員は二人のほうが面白い。この時点で、シンクなど水回りの機能はこれまで通りガレージに集約させて、本堂にはベッドとデスクと簡単な棚だけを作ることに決めた。

あとはこの骨組みに厚手のマットレスを買って敷けば、ベッドは完成である。ビジネスホテルの部屋のような、簡素な内装にしたい。



14時25分。単管パイプになぞの袋がぶら下がっているのを発見した。初めて見る物体だ。最初はハチの巣かなと思ったけど、穴がないので多分違う。なんだこれは。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日



<はじめての共同作業>

夕方、滝口さんがタバコを吸いながらふらふらと現れる。滝口さんの「久しぶり！」という元気な第一声が勉強堂に響いてなんだか嬉しくなる。

「ついこのあいだまで暑くてヒーヒー言ってたのに、急に寒くなった」という滝口さんに、「もしかしてもう霜降りてます？」と聞いてみたら「降りてるよ！明け方はもう4度くらいまで冷え込んでるんじゃないかな」と、なぜか楽しそうに教えてくれた。

「ちょっと村上さんに相談があるんだけど」と、滝口さんが自宅のほうを指さして「あそこに脚立が見えるでしょ、あそこの木をさあ…」と説明しかけて「近くまで行かないとわからないな。ちょっと、いい？」と申し訳なさそうに言う

ので「もちろんです」と即答した。

「村上さんなら知恵持つてると思って」という滝口さんのあとについていながら、そう言ってもらえるのは嬉しいけれども自分は樹木の知識は皆無だし果たして役に立つのかなと若干の不安を感じていたが、結果的に私は役に立った。

細長い三角形に刈り込まれている庭の木（「コニファー」というらしい）の背丈を揃えたいのだけど、柄の長い剪定用ノコギリを地面から伸ばして切ろうとしても、幹がしななって全然切れない。なにかいい方法はないか、という相談だった。

試しに脚立に登ってみたら、ギリギリ手が届いた。「いける？ いけそうだねえ。ちょっと待ってて！今持つてくるから」と滝口さんは家に戻り、片手に収まるサイズの電動チェーンソーと剪定用鋏を持って戻ってきた。

チェーンソーのスイッチの入れかたを教わり、再び脚立に登って、「わたし、下でしっかりおさえてますから」という足元から飛んでくる滝口さんの声を聞きながら、2本のコニファーの先端を切った。それから剪定鋏で形を整えて、滝口さんとのはじめての共同作業は10分程度で完了した。滝口さんも、途中から庭に出てきた奥さんも、私に何度もお礼を言ってくれた。



夜の勉強堂前の路地。道の両側のセイタカアワダチソウが、客を迎える幽霊屋敷の銅像のように並んでいる。向かいの岡川さん夫妻が畑をやめてしまったことで、この路地を通る人が私だけになってしまい、勉強堂はよりいっそう辺鄙な場所になった。ひとが二人通らなくなっただけで、ある場所が辺境の地になってしまうのなら、人間ひとりの力はぜんぜん侮れないなと思った。

11月22日

<滝口さんとの会話メモ>

車でコンビニへ出かけようとしたら、昨日に引き続き庭木の剪定作業をしていた滝口さんに声をかけられる。

「おでかけですか！」

「コンビニにいきます」

「あ、朝ごはんか何か？」

「はい！」

「そうですか。もしかしていまさっき起きた？」

「いまおきました」

「いいねえ！今日は昼くらいまでいるの？」

「そうですね。昼くらいには出ようかと」

「そうですか、昨日はありがとうございました！」

昨日の一件で、なんだか距離が縮まったように感じられた。車を置いていったん大町へ戻る。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

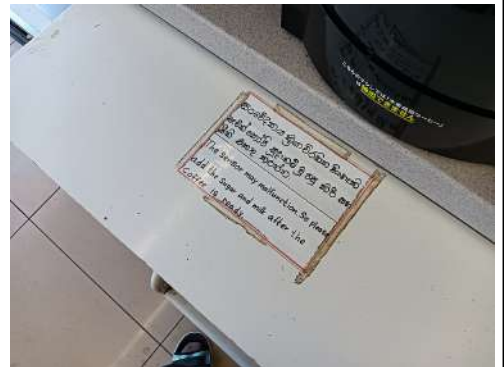
第二期（12月4日～30日）



12月4日

昨日から風が強い。ファントムで横になっていると、車体が時折揺れる。目が覚めた時、窓越しに見える空の青さにびっくりした。隅から隅まで探しても、雲がひとつも見当たらなかった。

「あいち2025」が終わって疲れが出たのか体が動かなくなってしまい、ほぼ二日間つつじヶ丘アトリエで寝ていた。ラーニングチーム仲間の多くが撤収をしてくれているなか、私はとにかく勉強堂を進めなくては、という一心で布団を出て、昨日の夕方に電車でここまで辿り着いた。駅の本屋でヘミングウェイの『老人と海』を買って読みながら来た。つつじヶ丘駅～日向駅がいつもより遠く感じられた。日向駅周辺には霧が出ていた。



近所のセブンのコーヒーマシンの多言語表記



まずは机を制作。天板は先日カインズで買ったもの。骨組みはすべて手持ちの端材。まだ天板は載せただけの状態で、骨組みとの固定は後日にする。



続けて、同じく先日手に入れた「ハモニカーボ」という透明プラダンのような板を、全部で10ある窓の大きさに合わせて切り出し、それぞれの窓枠に画鋲でとめる作業を行った。これで窓から冷気が入り込むことはなくなるだろう。思いがけずおしゃべりでいい感じになった。いちいち画鋲を外さないと窓が開けられないという難点はあるが、これは追々改善していきたい。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

セブンでお昼を買って食べたあと、工具箱の整理と本堂の掃き掃除をした。おそらく勉強堂を「掃除」したのは、これが初めてである。掃除をするだけで、その場所が自然と「室内」になっていくのはひとつの発見である。夏に使ってそのまま放置していたコテの受け台をガレージに持って行ったり、半年以上置きっぱなしにしていた木材などをすべて外に出したりした。資材がなくなり、ベッド（の骨組み）と机ができたことで、家らしい雰囲気になってきた。

道具箱の整理もした。ビスの空箱をよっつも畳んで捨てた。これまでの勉強堂制作のなかで出た大量の木片を目の前にしてふと思ひ立ち、ロケットストーブに何本か突っ込んで一年ぶりに火をつけてみた。当たり前だが、ものすごい熱が生まれた。落ち葉の温床なんてめんどくさい方法ではなく、このストーブを本堂に移動させて使えば一瞬で室内は暖まるだろう。



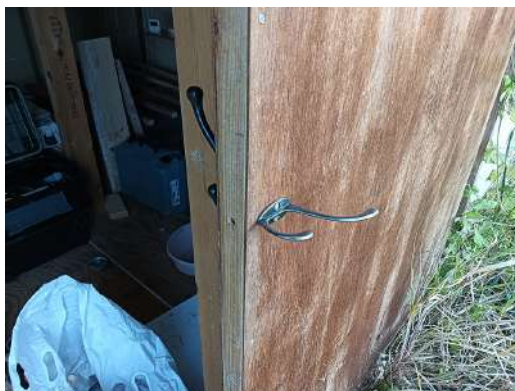
<いきなりコラム「炎が切り閉じるものについて」>

火は、それ自体が理由になる。揺れる炎を眺めていて、私はいったい、毎日毎日なにをこんなに焦っているのだろうと思わされた。ぼーっと眺めているうちに、とにかくなにかを終わらせなければ、はやく終わらせなければと思い込んでいる自分に気がついた。特に一人で勉強堂に来ると、今日はこれができたとか、これができなかったとか、そんなことばかり考えている。「目的」をずっと追いかけている。もっと、1日というものの大きさを感じてもいいじゃないか、「いったん落ち着け」と、炎に言われているような気がした。火はそれ自体がゴールであり、目的かつ過程でもある。時間はそこで閉じていて、他に何も呼び込まない。波、煙、川面、炎、雲、梢など、動きのあるもの、揺らぎのあるものは、その場所を世界から切り閉じる効果がある。集中して眺めていると、周囲の輪郭はぼやけ、時間感覚は希薄になっていく。ある面ではショート動画でも近いことが起きているかもしれない。でも炎や煙にはアテンションがない。こちらの注意を引きたいという意味がない。目的なものもない、ひとつの現象として現れ、現れた場で揺れ動くだけだ。誰に見られようとも、誰にも見られなくとも梢は風に揺れているし、雲はどこかからどこかへ移動している。森の奥ふかくにある、誰にも見られたことがない湖のような、その場所ではじまり、その場所でやすらい、その場所で完結するもの。子供の頃はそういうふうの世界を眺めていた。自然に世界を切り閉じる目をもっていたように思う。炎を眺めているときのような時間を、あらゆるものを対象に発揮することができた。瞬間ごとに照準を絞りを、閉じられた時間の中で暮らしていた。大人になって、視野の全体を眺めて生きること慣れてしまったけど、あの頃の目は忘れないようにしたい。世界を切り閉じるあのあり方は、よい「作品」のありかたに通じている気がする。



夕方「みきの湯」へ。名物「準天然温泉」の湯船に浸かりながら、温床の断熱のことを考えた。これまでの経験上、温床をいかに断熱するかが、発酵熱の安定のためには重要なことがわかっている。端材がいっぱいあるので、壁を二層構造にするのがよさそう。木材だけで高いレベルの断熱&蓄熱性能を実現しているログハウスのようなイメージ。また温床は大きいほうがよい。落ち葉はもっと必要になるだろう。

こちらみきの湯名物の、レストランの四面巨大テレビスクリーンには、芸能人が詠んだ俳句やガラスでつくった作品を、「専門家」とされる人が「良いところ」や「改善すべきところ」を教授して、点数をつけたり、「凡人」といったラベルを貼るといふ、毒みたいなテレビ番組が流れている。芸術祭で「ラーニング」として頑張ってきたこれまでの努力が馬鹿らしくなってしまうほどの馬鹿馬鹿しさ。なぜだろう。嫌悪感を覚える理由がよくわからない。よくわからないが、見ていて大変なストレスを感じる。俳句の先生が行う、これをこうしたほうが良いという類の指南は見ていてなるほどと思うところはある。たしかに、前の句よりも先生が直した句の方がよい気がする。しかしその過程をテレビで面白半分に晒すことは、芸術作品を作ったり見たりする人の心に、自分の見方、つくりかたは間違っているかもしれないという、制作と発表への萎縮を生んでしまいそうでこわい。



名古屋の矢田さんにもらったフックを取っ手として取りつける工事をした

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

<いきなりコラム「水風呂のあー」>

「みきの湯」には、サウナを出てさっとシャワーを浴び、水風呂にぎぶんと飛び込んで「あー、あー」と、気持ちよさのあまり声を漏らしまくる名物客がいる。昨日もいれば、今日もいる。しかしこれまで私はその「姿」を見たことはなかった。浴室に響く彼のを聞き、その存在を感じるのみだったのだが、この日初めてその姿を目撃した。声から想像していたよりも若そうなひとだった。水風呂に入ったときに思わず声が出てしまう気持ちはわかるのだけれど、彼のすごいところは、何度も何度も繰り返して唸るところだ。私が想像できる「自然に出るボリュームと長さのあー」の範疇を超えている（意識的に出しているのではないかと感じてしまう）ので、彼の声にはいつも驚かされる。自分が想像しているよりもずっと、人間という生き物は広くて大きくて、千差万別いろいろなあり方をしている。彼の「あー」を聞いていると、そんなことを考えさせられる。

夜、あたたかい寝袋にくるまって、ファントムの後部座席のスライドドアを開け、頭の半分だけを外に出し、さかさまに夜空を見上げる。満月が真上から雲を照らしている。群れのような雲が同じ速度で上に移動していく。顔に冷気が刺さってくるけど、からだはぼかぼかしている。「いい感じだあ」と声が出た。空は明るいけど、星もたくさん見える。月が、地球の唯一の衛星で、物理法則だけに従って何億年も地球の周囲をまわり続けている。急に「温床はめっちゃ大きく作ってやろう」と思った。

12月5日



今日も晴天。昨日と違って風がない。お日様があたたかい。朝、資材を温床の建設予定地に移動させ、温床の大きさを決めた。1.8m×2.7m、高さ90cmで作ることにした。このくらいあれば本堂を暖められるのではないかとこの予感のようなものを頼りに決めた。本当にただの経験則、なんとなくでしかないが。まずは垂直の角材を4本と水平の角材を4本用意して地面に組み立てる（写真を撮り忘れた）。南側の地面が、版築壁を作るときに捨てた土のせいで盛り上がりがあるので、垂直材の長さがすべて違ってくる。勉強堂ではよくこういうことが起こる。過去の行為の積み重ねが即、今の足場になってしまう。凸凹した地面のせいで水平を取るのに手間取る。土を捨ててすぐに地面を均せばこんなことにはならなかったと思うけど、そんな暇はなかったよな。

昼、ランドロームに行って天井を腹に入れ、山武の森公園の芝生広場で落ち葉を集める（右写真）。1000リットルの大きなフレコンバッグを広げ、長いレーキを使って堂々と作業をしていたので、公園を散歩している人の目には、私の姿は公的な清掃員のように映ただろう。公園で落ち葉を集めるだけで、人は何者かになれるのである。

早くも傾いてきた西陽を受けながら、しゃくしゃくと心地よい音を鳴らす落ち葉を集めるのは気分がよかった。ポッドキャストを聞きながら作業をしつつ、ときどきそれを消して落ち葉のサラウンドを堪能し、またポッドキャストに戻る、を繰り返した。ポッドキャストという過去からやってきた音と、目の前の葉っぱが鳴らす現在の音との行き来には、言いようのない快樂があった。

一度だけ、散歩中のおじさんに声をかけられた。

- 「ごくろうさまです。大変だねえ」
- 「どうも。ありがとうございます」
- 「でもあったかいからいいねえ」
- 「あったかいですよ、今日は」
- 「よく集めたわこんなに……」

鳥の羽と葉っぱの形が似ていることにも気がついた。中央の太い脈から側脈が伸びていて、全体に流線型をしている。葉っぱは色々なものに似ている。上から見た山脈にも、河にも似ている。ソローもこの相似形に気づいていた。



発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日



ガラ袋10と1000リットルフレコンバッグの70パーセントくらいまで集め、駐車場に停めた車に運んでいる最中、小さな子供が「なにしてんのー？」と走ってきた。私は「落ち葉集めてんねん」と答えた。こどもはすぐさま「なんでー？」と理由を知りたがった。ここで私は説明が面倒だな…と思ってしまい、「落ち葉集めてんねん」と同じことを繰り返してしまったのだが、「落ち葉を集めたいからだよ」と答えればよかった、とあとで後悔した。大人だって、目的はないけどやってしまうこともあるんだよ、と伝えればよかった。まあ、今回は目的があるのだけど。



今年も気がつけば落ち葉を集めている。名古屋の足湯プロジェクトのときも集めたり、去年は芸術祭の作品のために大町で集めたり、一昨年は代々木公園で、もっとさかのぼれば三鷹や、札幌でも集めている。どこの現場でも気持ちのいいサラウンドと暖かい日差しが印象に残っている。札幌の落ち葉はチャイナタウンみたいに色鮮やかだった。

集めた葉っぱの樹種はよくわからなかった。山武の森公園の芝生はぐるりと桜並木に囲まれていて、落ち葉はその下にたまっていたのだけど、葉っぱを見る限り桜の葉とは思えない。これは何の葉っぱなんだろう。

今日の成果を車にパンパンに詰め込んで勉強堂に戻る。

それからまた30分くらい温床の制作の続きをやっていたらもう暗くなってしまった。日が落ちるのがはやい。



体を移動させたり、挨拶程度でも人と話したりすると、なんとなく「仕事した感」が強まる。ずっと勉強堂でちまちまと作業をしていた昨日と比べて、満ち足りた1日に感じられた。

12月6日

(朝、ファントムの窓が凍結して、雪の結晶のような美しい模様ができていた。天気予報アプリによるとマイナス2度まで下がっていたらしい。どおりで寒いわけである。車内の温度はもっと低かったのではないか。窓ガラスのわずかな凹みや目に見えないゴミなどのせいなのか、模様には不思議なパターンがあった。明らかに直線になっていたり、細長い二等辺三角形が並んでいたり)



昨日の続きで温床の箱を作る。断熱のために二層構造にする。適当な木材を必要な箇所にあてて、油性マジックで線を引き、丸ノコで切って、インパクトでビス打ちする。これの繰り返し。「発電所」をつくったときと同じような作業。

途中、「村上さーん」という声がどこからともなく聞こえ、きょろきょろしてたら、自宅の庭でこちらに向かって手を振る笑顔の滝口さんがいた。僕も手をふりかえして、「今日あったかいですね〜」と声を張ったのだけど、滝口さんの応答は「さむいから気をつけてねー！」で、それが、とてもよかった。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

<いきなりコラム「つぎはぎが好き」>



クルト・シュヴィッターズ (1887-1948)
『ミランズ・パーク』1947

なぜ箱をこんなにもつぎはぎに作るのか。私は自問した。木材が余っていて、もったいなくて、それらを使おうとしたら自然につぎはぎになるから、だと最初は考えた。しかしこれでは答えにならないということに、すぐに気がついた。材料がいくら余っていても、つぎはぎで作らない人はいるからだ。余っていても、新しいパネルを買うことはできる。「余ってる材料があるから使う」という判断を下す前に、明らかになんらかの意志（あるいは美的感覚）が働いている。おそらく私は、自分が「新品の合板や角材を買って、まっさらで清潔な箱をつくる」という選択肢をあらかじめ排除している。無意識に遠ざけている。ここまで考えてから、「つぎはぎで構成された面が好きなのかもしれない」ということに思い至り、ハッとした。初めて気がついたが、私はつぎはぎフェチなのかもしれない。マックス・エルンストのフロッターージュ作品とか、クルト・シュヴィッターズのコラージュとか、ジョセフ・コーネルの箱作品とか、「四角いひとつの面の上でいろんなものがひしめいている感じ」を美しいと思っている。

沖縄にある母の実家の、継ぎ足しの連続で増築された結果どこまでが最初の物件だったかがわからなくなっている家や、長野でみかける農小屋や、東北で見た漁師小屋。つぎはぎで作られたものは、それがつくられたときの時間というか、制作者の手つきを想像させる。制作者が即興的に作った記録が、ファサードとして

そのまま残っている、という状態を私は「美しい」と感じている。ただし、角や側板のへりなど、箱の輪郭線にあたる部分は、綺麗に納めるべきだ。そうでないと美しくないと思っている。

もちろん「材料が余っているからそうしている」という一面と、「つぎはぎが好き」という一面は、鶏卵問題のような話で、仮に手元に「まっさらな大きな合板」が余っていたら、私はそれをわざわざ切り刻んでつぎはぎにするようなことはせず、まっさらな箱を作っているだろう。新品であれ廃材であれ、手元にあるものを使い尽くした結果あらわれる質感に美しさを感じている。そうなってくると、私が制作において大事にしていることは、かっこよくいえば「プリコラージュ」悪く言えば「横着さ」ということになる。



暗くなるまで作業をして、久々に松の湯に来てみた。入口前の喫煙スペースで、風呂上がりと思しき若い二人組が話し込んでいて、通りかかった時に「こんばんは」と声をかけてくれた。私も挨拶を返す。相変わらず番台のおじちゃんはスーパー無愛想だったが、こんばんはと目を見て話しかけたら「ああ…」と声を出してくれた。私も、話しかけられても声を出せていないことがあるので気をつけようと思ったので、よしとする。特に親しい間柄において。

潰れた商店みたいな向かいの建物も、入り口の屋根のテント地がぼろぼろに破れているし、その隣の空き家は蔦に覆われていて庭は草ぼうぼうで塀の上までススキが顔を出しまくっているし、道は暗いしで、崩壊にむかっているような街のなかで、松の湯の、ささやかながらも確かにともっている看板の光は、ここにはまだ人間が暮らしているという証拠のようで、ほっとする。そうとうな高齢だと思っただけで、末長く明かりをともし続けてほしい銭湯である。

<直感について>

50年くらい前から使われていそうな金属製のコインタイマーに、おそろおそろ硬貨を入れたら無事スイッチが入ってくれてホッとしたドライヤーで髪を乾かしながら、頭によぎったこと。

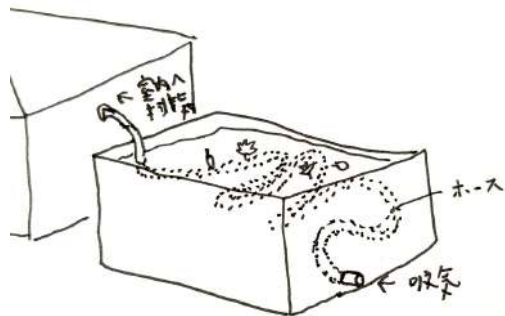
ある瞬間に「ぴん」と電球がともるみたいに閃いて、無数の石のなかから自分が拾うべきひとつを見出すようなことではなく、あるいは論理的な思考を積み重ねていって、やがてひとつの石にたどり着くような場合でもなく、あれこれと散発的な考えを巡らせながらぶらぶら歩いているうちに、気がつけばその手に石ころが握られているようなとき、たいていそれは大事なものであることが多い。長い時間をかけて蓄積された経験が、無意識のうちに、知らず知らず選び取っているもの。それが直感かもしれない。この言葉には瞬間的なひらめきのようなイメージがあるけれど、私にとってそれは、もうすこし地味な、気がつけば手にして捨てられなくなっているようなものだ。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

12月7日



朝、起きてぼーっと制作途中の温床の箱を見ていて、重大なことに気がついた。「ホースでいいんじゃないかね？」と。そこで暖房システムにつかう管（本報告書P326参照）を、塩ビパイプではなく太めのホースで試すことにした。そっちのほうが扱いやすそうだし、踏んでも壊れなさそう。



朝ごはんはセブンの次に近いローソンへ。駐車場が高台のようになっていて、田んぼと低い丘のような山並みを一望しながら食べる。太陽の光の粒が空気中に満ちているようで綺麗だった。勉強堂に帰ってきたらなんだか眠気に襲われてしまい、12時半くらいまで昼寝した。



起きてせっせと作業。温床の箱づくりの続き。オーディオブックで『目的への抵抗』と『八月の御所グラウンド』を聞きながら作業。暗くなってきた頃に箱が組み上がった。正面(右上)よりも裏(左上)のほうがかっこよくできた。明日、これに塗装をすれば完成。道具を片付けようと本堂の中に入ったら、外よりも暖かかった。日が出ているときは外よりも中のほうが涼しかったけれど、いまは逆転している。版築の壁は室温を安定させるらしい。

みきの湯でお風呂とサウナでさっぱりして、もどってきて久々にアールウスに来た。「おひさしぶりです」「寒くなりましたね」「元気ですか？」と、声をかけてくれて嬉しい。マトンピリヤニとマンゴーラッシーは今日もおいしい。



<いきなりコラム「今日の感想」>

重大な発見はしたが、シンプルな1日であった。もう書くことないわ。たぶん、ちょっと疲れてる。というのも、昨日あたりから鼻水が出始めた。車内が寒いからかもしれない。夜は外よりも暖かいことがわかったし、明日からは本堂に寝床を整えて、そっちで寝ることにする。

料理とかがしたい。勉強堂でもうすこし気楽に料理ができるよう、環境を整えるべきだ。外食とコンビニ・スーパーだけでは生活している感じがしない。食べている瞬間は、どれも美味しいし、なんの不満もないのだけど、お腹すいたな、何食べようかな、と考えるとき、選択肢に外食かコンビニしかない、自分が自分の意思で生きているんじゃない、何者かによって生きさせられているような感じを受ける。たぶん、外に行けばできあいのものがあるのに、わざわざ自分で切ったり焼いたりするという、「わざわざ感」が大事なんだろうと思う。時々、わざわざなことをやらないと、それこそ「目的のための日々」という感じが強まってきつくなってくる。おしゃれをしたりするのもこういうことなんだろう。いまは制作をすすめるために勉強堂にきていて、制作のついでに生活をしているような感じなので、目的だけが日々を駆動させている感も否めない。制作と生活がぴったり一致してしまうのも、精神衛生上よくないのかもしれない。ここで「生活」をちゃんと営んでみたい。しかし制作にある程度キリがつかないと生活のフェーズに移れない。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

12月8日

<今日やったこと>

- ・温床ボックスの塗装完了。屋外木部用油性ペンキを塗った 写真①②
- ・山武の森公園に行き、ガラ袋で9袋ぶんの落ち葉を追加で集めた 写真③
- ・本堂のベッド用骨組みの上にエアマットを敷き、就寝環境を整えた 写真④
- ・カインズで温床に埋め込むホースの視察をした。耐寒パイプと塩ビパイプとパイプファンの組み合わせでシステムを組んでみることに 写真⑤

<今日発見したこと>

山武の森公園の落ち葉。コナラっぽい 写真⑥



①



②



③



④



⑤



⑥

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日



<いきなりコラム「サンテオレ」>

勉強堂から車で20分ほどのところに「サンピア」というショッピングセンターがある。1978年創業らしい。古びた文字看板を見ているだけで、長い間地域によりそってきたのだなという趣深いものがこみあげてくる、近くにきたらできるだけ行きたい場所。中もいい雰囲気、以前来た時は地元の高校生たちが通路の段差に座って雑談をしていた。ここに入っている「サンテオレ」というお店が気になっているのだけど、くる時はいつも夜になってしまうので、店が閉まっているところしか見



たことがない。そのサンテオレが、いつかは全国に100店舗を誇ったハンバーガーチェーンらしいが、現在はここサンピア東金店に1店舗しか残っていないという情報を友人から送ってくれた。立体文字の看板とハンバーガーの絵が、あまりにもかわいい。駅の標示などにもたまに残っている、このような立体文字を見ると、その場所に対する愛着、そこに文字を置くことへの覚悟の大きさ、責任感のようなものを感じる。現代の、いつきだけ出店してお金を稼いだら撤退するような場所への態度というか、すぐに店舗が入れ替わる前提で平面的な看板を出すのみになっているスタイルになる前の、昭和という時代の時間感覚が表れていて、眺めているだけで時間のスピードが遅くなるような気がする。サンテオレ、まだ一度も行けていないので、一度は行ってみたい。潰れてしまう前に。

<いきなり二連続コラム「炭酸飲料の歌」>

気がつけばクリスマスソングを口ずさんでいる。湯船に浸かっているとき、ホームセンターで材料を物色しているとき、温床の箱にペンキを塗っているとき……。 「ラストクリスマス」や「もろびとこぞりて」などが、頭で流れるよりも前に、口から出てしまっている。コンビニでもスーパーでもスーパー銭湯でもホームセンターでもファミレスでも、どこに行ってもクリスマスソングが流れていて、すっかり洗脳されている。「もろびとこぞりて」は中毒性が強い歌だ。そして、どうしても炭酸飲料のことを思い浮かべてしまう。

夜、本堂で横になってみる。車の中よりも空気がしっとりしていて、気持ち良い。肺にやさしい空間だ。せいぜい3メートル四方の、決して広くはない部屋だけれど、不思議なことに窮屈ではない。一枚一枚、微妙に色合いの異なる11枚の版築壁に圧迫感はなく、むしろ時間の広がりを感じさせる、風通しの良さがある。このひとつひとつにかけた時間と、携わってくれた人の顔を知っているからだと思う。本堂をつくるとき、ユンボで穴を掘り、コンクリート平板の基礎を並べ、骨組みを立てて、そのままぬるぬると版築作業を始めてしまったことに、ほんのすこし心残りがある。上棟式のような儀式をやるべきだったのかもしれない。けれど、この版築の壁をつくるときに大勢の友人が手伝いに来てくれて、それぞれに(きつと)楽しんでくれた時間が、儀式のような役割を果たしてくれているとも思う。儀式というものは、複数の人間が同時に目撃するということにその本質がある。その過程を経ることで、その家が世界の中に生まれなおすというか、動物ではなく人間のものになるようなところがある。この本堂も、すべての作業を私一人で進めてしまっていたら、いまのような風格はないだろうな……と、気がつけば考えていた。こうやって抽象的な思考ができるということは、ここに「暮らしている」ということではないか。いい兆候だ。今日はよく眠れそう。

12月9日

本堂で寝てみた。昨年の冬に導入したエアマットを膨らませ、その上に銀マットを敷いて寝袋で寝た。やっぱり、車で寝るよりもこちらで寝た方がよい。いつもより長い時間眠れたとか、寝起きがすっきりさっぱりで気持ちよかったとか、そういうわかりやすい効果ではないのだけど、目覚めるべき場所で目覚めた感慨というか、自分はこういうところで暮らすべきだという、ふさわしさのような感触がある。たとえば車中泊がコンビニ弁当をイートインコーナーに座って割り箸でかきこむようなことだとすると、工事している途中の本堂で目覚めることは、きちんと家の食卓に座って卵かけご飯とインスタント味噌汁を自分の箸で口に運ぶようなことに近い。不思議だ。車中泊はとても快適である。軽バンの後部すべてを寝室にしているので、広さにしてセミダブルサイズのベッドに匹敵する1.4m×1.8mを確保しており、そこに二人分のキャンプ用エアマットを広げ、さらに銀マットを敷いている。睡眠時間もたっぷりとしている。ここ数年、3~4時間半くらい寝たら目が覚めてしまうという症状に多少悩まされているけれど、二度寝三度寝を重ねることで合計睡眠時間は8時間以上はとれている。まったく言うことなしのコンフォータブル車中泊のはずなのだけど、繰り返していると、なぜか精神的に消耗してくる。本来寝室ではない場所で寝ているという事実が、自分でも気が付かないところでじわじわと精神を蝕んでいるのかもしれない。

発酵槽の制作、キャンプ場と公園での落ち葉集め

作成者：村上 慧

2026年3月12日

私は本堂にベッド用の骨組みをつくり、そこに仮のエアマットを敷いて寝た。この「寝るための場所で寝た」という事実が重要なのだろう。正直、慣れている車中泊に比べると、水筒やメガネやペットボトルの置き場に困ってしまって不便さもあるのだけど、それに関わらず本堂で寝た方が、気分がよかった。寝る瞬間も、ああ、これが幸せのひとつのかたち……と思った。



さて、今日は午前中に追加で落ち葉を集めた。山武の森公園で新しい落ち葉スポットを発見し、ガラ袋を10袋分やった。私にとっては大変都合がよいスポットで、風によって自然と一箇所に集結していたコナラの落ち葉を短い時間で大量にゲットできた。今年の作業はこれで終了。「また来年」と別れの挨拶をして、お昼過ぎに勉強堂を出た。



<いきなりコラム「大量の荷物」>

勉強堂からの帰り道、アートアワードの副賞としてついてきた、2年間の寺田倉庫無料使用権の期限が切れるので、荷物を取りに寄った。倉庫のドアをあけたとたん、思っていたよりも4倍くらいの量の荷物が姿を現した。私は思わず「こんなにか」とひとりごちた。「1回で載せられるかなあ……もう一往復しないと無理かなあ……」とぐるぐるぐる考えながら、倉庫の荷物を台車に積み込み、駐車場に停めたファントムのそばにおろし、また倉庫に戻り……という作業を2回繰り返して、そして3回目の荷物を積みに行ったときに、自分の思考回路の過ちに気がついた。「載せられるかどうかじゃない、載せると決めるかどうかだ」

多くの人間は、車やリュックなどにもものを詰め込むとき、そこに積み込める容量の多寡を「積載量」の問題として考えてしまっているが、実は「載せると決める」ことが山を動かすほどの力を持つことがある。とうてい積み込めるとは思えない量の荷物が、決断することによって嘘みたいに収まったりする。物理的に可能か不可能かの話ではなく、意志の問題なのである。そして私は寺田倉庫の荷物を全て（なかば強引に）ファントムに詰め込み、狭くなった運転席で縮こまりながら運転を続け、つづじヶ丘アトリエまで戻った。私はその荷物と共に旅をした。浜松に三泊で仕事をして、名古屋に寄って一泊で仕事をして、無事大町へ帰りつくことができた。ひとつだけ、名古屋を走行中に車のオイルランプが点灯してしまい（初めて見た）、ガソリンスタンドでオイル交換をしようとしたのだが、荷物が多すぎて座席を倒してエンジンルームを開くことができず、店員さんと一緒に呆然と立ち尽くしてしまう時間を経験した。しかし何人もの店員さんが協力してくれ、荷物を持ち上げつつどうにか後ろにずらし、無事交換することができた。



12月30日

いよいよ迫りつつある、勉強堂への暖房の実装のため、大町の精米所で米ぬかを購入した。いつものとおり事前に電話して「米ぬかを90キロ売ってほしい」と伝え、今日取りに行く約束をして来た。15キロで300円なので、90キロで1800円。ネットで売っている米ぬかの相場を考えると、信じられない値段である。ありがとうございます、と礼を言ったら精米所のおにいさんは「とんでもない！」と、本当にとんでもないという顔で首を振っていた。大町が誇る最高の精米所である。

おわりに

本報告はここで一旦区切ることにする。暖房の実験まで辿りつけなかったが、現実にはもう、本堂の工事（工事する対象から生活する空間へ）はひとまず完了し、今年の暖房の実験も終えているのだが、報告書の執筆が追いついていない状況だ。